

令和 3 年 5 月 5 日現在

機関番号：11301
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2018～2020
課題番号：18K03000
研究課題名(和文)生活史研究とフィールドワークの新展開

研究課題名(英文)Methodology of life history study

研究代表者

辻本 昌弘 (Tsujimoto, Masahiro)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：90347972

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、生活史研究の新しい方法論を構築することである。生活史とは、インタビューや文書史料などをもとに、個人の人生の歩みをくわしく記録したものである。本研究では、生活史研究におけるインタビューと解釈について検討したうえで、以下の2点を明らかにした。(1)生活史研究の意義は、既成の通念を揺さぶり新たな解釈を生み出す手がかりを提供することにある。(2)生活史研究の意義を実現するためには、インタビューにおいて出来事を写生する口述を語り手から引き出すことが肝要である。以上を踏まえて、生活史研究におけるさまざまなインタビュー技法、さらにインタビュー結果を編集する上での留意点を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

生活史研究は社会科学のさまざまな分野で活用されている重要な方法である。本研究の学術的意義は、インタビューの技法や生活史作品を編集するうえでの留意点など、新たな方法論を構築するとともに、生活史研究の本質に対する洞察を深めた点にある。

また現代日本では、郷土の歴史を記録する一般市民の活動が盛んにおこなわれている。本研究で彫琢した方法論を社会に還元できれば、一般市民の歴史記録活動にも貢献できると予想される。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to clarify the goals and methods of life history study in social science. Life history is a process to record, in detail, the life course of a specific person through interviews and documented materials. The following two points are elucidated following the examination of the characteristics of interviews and interpretations in life history study: (1) the goal of life history study is to create a new interpretation that is different from conventional ideas shared by the public; and (2) in order to achieve the goal of life history study, it is necessary to obtain a narration that concretely depicts events experienced by the person being interviewed. Based on the above, a variety of issues related to the interviewer's skill are discussed, as well as issues regarding the description of life history based on the narration content in the interview.

研究分野：社会心理学

キーワード：生活史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

生活史はライフ・ヒストリーやオーラル・ヒストリーとも呼ばれる。生活史は、インタビューや文書史料などをもとに特定人物の人生の歩みをくわしく記録したものであり、社会科学のさまざまな分野で活用されている。本研究は生活史研究の新たな方法論の構築を目指して開始された。その背景を2点に集約して述べる。

(1) 研究代表者は、アルゼンチン日系人や沖縄出身者の調査をおこない、本格的な生活史研究を2冊の著書として刊行してきた(辻本, 2013, 2017)。これらの生活史研究では、対象者になってくれた語り手に長時間にわたるインタビューを実施し、そのすべてを逐語録に起こして編集し、文書史料からの引用を加えたうえで著書にまとめるという地道で手間のかかる作業を遂行した。この作業の過程で、生活史研究の方法論について、粗削りではあるものの、たくさんの着想を得ることができた。これらの着想を明晰な知見に仕上げるために本研究を立案した。

(2) 現代日本では、郷土の歴史を記録する一般市民の活動が盛んにおこなわれている。たとえば、昔日の慣習や行事を古老から聞き取る活動、高齢者から戦争体験を聞き取る活動、大地震などの被災者から災害体験を聞き取る活動などである。こうした一般市民の活動は大変貴重なものである。ただし、聞き取りをして文章にまとめるという作業は決して簡単なものではない。生活史研究で彫琢されてきた技法を明晰な方法論に仕上げ、社会に還元することができれば、一般市民の歴史記録活動にも貢献できる。こうしたことを念頭に、生活史研究のインタビューや編集上の留意点を明らかにする作業に着手した。

2. 研究の目的

(1) 第1の目的は生活史研究の新たな方法論を構築することである。研究代表者は、みずから生活史研究を実施してきた経験から、インタビューの技法、逐語録の編集、文書史料の活用、さらには生活史研究の意義についてさまざまな着想を得た。これらの着想を精緻化して生活史研究の新たな方法論を構築し、理論論文にまとめることを達成目標とした。

(2) 第2の目的は、新たな方法論をふまえた次なる生活史研究やフィールドワーク研究に着手することである。生活史研究やフィールドワーク研究は完成までに数年を要するため、今回の研究では予備調査を実施して研究を軌道に乗せるところまでを達成目標とした。

3. 研究の方法

(1) 生活史研究を方法論的に総括する作業を実施した。これまで研究代表者は、たくさんのインタビューをおこない、膨大な逐語録を作成し、それらを著書として刊行してきた。これらの作業を細部にいたるまで洗い直し、重要点や問題点を抽出し、新しい方法論を構築するための材料とした。

(2) 関連する先行研究を網羅的に再検討した。再検討の対象としたのは、社会心理学・犯罪心理学・社会学・人類学・政治学・歴史学における生活史研究とオーラル・ヒストリー研究である。また生活史研究は過去の出来事の口述を扱うものであることから、歴史哲学・ナラティブ論・出来事論などの先行研究も検討の俎上にのせた。

(3) これまでフィールドとしてきた沖縄において資料収集を実施した。また試行的なインタビューを行った。なお最終年度は新型コロナウイルス感染症流行のため、対面でのインタビューやフィールドワークは控え目にせざるをえなかった。

4. 研究成果

(1) 本研究で構築した生活史研究の新たな方法論を、学術論文「社会科学における生活史研究、再考」として発表した。この学術論文は本研究の中核をなす成果であり、主要な知見は以下の4点に集約される。

生活史研究の意義は「既成の通念」を揺さぶり新たな解釈を生み出す手がかりを提供することにある。過去の出来事は無限にあるのだから、歴史の探求にあたっては、なんらかの観点から過去の出来事を取捨選択しなければならぬ。取捨選択の基準になるのが既成の通念である。既成の通念とは、すでに世間に流布している人間観・社会観・時代観のことである(人間・社会・時代に対する思い込みや固定観念)。歴史の探求を前進させるためには既成の通念を揺さぶらなければならない。既成の通念を揺さぶるとは、既成の通念のみならず、さまざまな観点から過去の出来事を選択し、新たな解釈を多角的に生み出すことである。生活史研究は、語り手に対するインタビューをつうじて、既成の通念に収まらない過去の出来事を掘り起こし、新たな解釈を生み出す手がかりを提供するものである。

インタビューで、既成の通念に収まらない出来事を掘り起こすためには、語り手に「出来事の写生」をしてもらうことが肝要である。出来事の写生とは、こまごました出来事をひとつひとつ具体的に描写する口述のことである。人生で遭遇する無数のこまごました出来事は、既成の通念に収まりきらない。こまごました出来事、意外性のある出来事を写生する口述をしてもらうことにより、既成の通念をゆさぶる生活史研究となる。戦場・虐殺・災害といった極限体験について口述してもらう場合にも出来事の写生は有効である。不条理に満ちた極限体験は一貫性のある筋書きをもったわかりやすい物語にまとめあげることができないが、極限状況下のひとつひとつの出来事を淡々と並べるように写生することは相対的に容易である。なお、出来事の写生の対極にあるのが、抽象的な信念や想いの口述である。抽象的な信念や想いの口述は既成の通念を揺さぶらない。

インタビューで出来事の写生を引きだす技法として挙げられるのは、インタビューの時間と回数を十分に確保すること、(信念や想いを尋ねる質問ではなく)具体的な出来事を尋ねる質問をすること、文書史料を活用して具体的な出来事を挙げて質問をすることである。インタビュー結果を編集して生活史作品を執筆する上での留意点として挙げられるのは、一貫性のある物語にするのではなく出来事を並べるように執筆すること、読み手が多角的な解釈をすることができるように口述された出来事の文脈を加筆すること、口述と文書史料を照合してそれぞれの史実性を吟味することである。

生活史研究は、個の理解を目指すものでもなければ、個の全体性を捉えるものでもない。出来事を写生する口述を引きだし、既成の通念を揺さぶるものである。そうじていうなら本研究は、語り手・聞き手・読み手のあいだで、人間・社会・時代に対する新たな解釈を多角的に生みだすいとなみとして生活史研究を捉え直したものである。

(2) これまでの社会科学における生活史研究の中から、安倍淳吉(1915-1993)がおこなった犯罪研究について詳細な再検討を加えた。その成果は「犯罪者の生活史と地域社会 安倍社会心理学、再考」と題して、台湾で開催された国際シンポジウムで報告された。概要は以下のとおりである。

東北大学で教鞭をとった安倍は独創的な犯罪研究を推進した。安倍の研究には生活史の検討が組み込まれていた。戦争前後の仙台アンダーワールドを犯罪者がいかに生き抜いたのか調べた研究では、個々の犯罪者の生活史上の出来事を具体的に記述し、それをもとに時代変化と犯行深度の関連を明らかにした。これは、生活史の積み重ねにより個人・社会・文化の出会いを捉えるという方法論の有効性を示すものである。

また安倍は犯罪者に対するインタビュー技法を彫琢した。たとえば、犯罪者が「処分決定前は自己防衛的、処分決定後は重大性を誇張」する回答をしがちだという興味深い指摘をしている。さらに安倍は、少年院におけるインタビューを題材にして、既成の通念に収まらない口述を引き出す技法についても発言したことがある。この発言の重要性については学術論文「社会科学における生活史研究、再考」で論じた。

(3) 次なる生活史研究とフィールドワークに着手した。これまで実施してきた沖縄での生活史研究を発展・深化させるために、沖縄現地に於いて資料収集と関係者からの情報収集をおこない、研究の方向性を立案した。

生活史研究は、戦争や移民など極限体験を調べる場合にとりわけ有効である。そこで徴兵忌避など戦時下の庶民の行動に着目して資料収集を実施し、抵抗という観点から研究を発展させる可能性を探った。また、生活史研究ではしばしば高齢者を対象とするが、高齢者の口述の背後には死の問題があることがうかがわれる。このことをふまえて人生と死の問題について文献調査を実施した。抵抗や死という論点から研究を深化させ、成果にまとめていくのが今後の研究目標である。

<引用文献>

辻本昌弘(2013) 語り 移動の近代を生きる 新曜社

辻本昌弘(2017) 沖縄、時代を生きた学究 沖縄タイムス社

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 辻本昌弘	4. 巻 20
2. 論文標題 社会科学における生活史研究, 再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 質的心理学研究	6. 最初と最後の頁 63-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 辻本昌弘
2. 発表標題 犯罪者の生活史と地域社会：安倍社会心理学，再考
3. 学会等名 犯罪問題対策国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 辻本昌弘
2. 発表標題 生活史研究の意義と方法
3. 学会等名 東北心理学会第72回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------